敦煌本アビダルマ文献の研究 —Ⅱ—

A Study of the Works of A-p'i-t'amo from Tun-huang

前 田 至 成

1 はじめに

道士王圓録が敦煌莫高窟の17号窟耳洞（ペリオ編号159、張大千編号143）に投宿し、約4万点にのぼる文書を発見したのは今世紀初頭の西歴1900年4月27日のことであった[1]。爾来82年の歳月を経て仏教文献（87.5%），道教文献（3.8%），儒教文献（0.9%），文学典籍（2.1%）、文書類（5.6%）[2] を含む尨大な資料は漢語文献とサンスクリット、チベット、ソグド、ウイグル、コータン、クチャといった胡語文献に分類されて世界の学者の研究するところとなり、所謂、Tun-huanology「敦煌学」の名を冠せられることとなった。

敦煌は中原（中国本土）より見れば甘粛省の一辺境都市にすぎないが河西回廊の最先端、東西交易の東側拠点として古来、漢民族と北西諸民族の争奪の地であった。遠く西方よりやって来た人々は天山北路、天山南路、西域南道の各道を経て敦煌の地で合流し、はじめて中国領に入ったのである。敦煌を西域への出発点とし、又、敦煌を西域からの最終地点として「絹の道」を歩む人々は貿易と政治、更には宗教伝道に自らの生命を惜しまぬ人たちであった。「敦煌」の名がはじめて示される『史記』の「大宛伝」[3] では漢の武帝の時（B.C 140即位）敦煌郡下に敦煌、冥安、効穀、淵泉、広至、竜勒の六県があり人口38,335人がいたというから、現在の甘粛省酒泉区敦煌県の人口数およそ9万人に比して[4]、往時の敦煌郡も交易の要衝として又、重要な地であったことを推測することができる。

敦煌の地は又，中国のどの地よりも早く仏教を受容したところでもあった。入唐僧はこの地を経て中原へ向い、入竺僧はこの地を経て大沙河へ入っていった。従って高僧たちの通路となった敦煌が次第に崇仏の情を養う宗教都市の性格を備えてくるのも当然の成り行きであった。西域文化の中心地として文運隆昌の地であったこの地にはやがて僧尼の布教と教育とが係って，多数の寺と窟院が開かれるのである[5]。莫高窟文書の多くが仏教文献であることは敦煌の文物が多く仏教との係りの中で語られていたことを示す資料であると考えてもよいであろう。

莫高窟文書の研究によって宗教都市敦煌の変遷もかなり詳細に窺うことが出来るようになってきた。特に漢民族支配の時代以降、チベット系民族（吐蕃という）が敦煌を支配した動乱

期、更には再び漢人豪族の支配に戻った帰義軍期の状況はスタイン、ペリオ、オルデンブルグ等の将来した文書の研究によって飛躍的に前進した。今、ここではチベット系民族が漢民族を東に追いやり支配を確立した所謂、吐蕃支配期の敦煌に焦点をおき、この8世紀から9世紀にかけて（厳密には A. D. 781～866）の敦煌仏教の実状を検討することによって、従来、ほとんど研究されることのなかったアビダルマ文献の敦煌仏教圏における受容の問題を考察したいと思う。特に本論では敦煌圏で独自に訳出され注釈された『大乗四法経論広釈開決記』[6] を主な資料として敦煌における菩薩思想の問題にも言及してみたいと思う。

2　吐蕃支配期の敦煌と仏教

敦煌を中心とする沙州一帯は安史の乱を機に吐蕃の統治下に入る。A. D781年のことである。吐蕃支配期には僧尼の数は急増し、寺院の建立、仏洞の補修なども次々に行われたことが文書から知られる。帰義軍期（A. D. 866～871）に至ると16寺院、3禅窟、僧尼数1千人前後にのぼったと考えられている[7]。行政機構、流通経済の面でも唐制は廃止され、吐蕃独自の制度が施行された[8]。制度の改変はやがて庶民の言語生活にも変化をきたし、吐蕃に隷属する漢人たちは70年間に幾度か一揆、反乱を企てたのである[9]。このような国情下での仏教は当然のこととしてチサン王を頂点とする節度使（khri dpon)、節児（rtse rje)、都督（to dog）といった官吏による指導をまともに受けることとなり[10]、地祖の納入や財産調査、僧尼の兵役、力役の義務が課せられ、天災地変の自然現象の去襲までも僧尼の責務としたため、各寺で盛んに祈祷会がもたれたのである[11]。要するに吐蕃支配下の敦煌仏教は少くとも、五穀豊饒と国家安隠祈願を柱とした国家仏教の性格を持っていたと言えるのである。次第に敦煌における吐蕃支配が安定化の方向に向うと、漢人に読ませるための仏典の書写作業、蕃漢両国語の交易による敦煌独自の仏教擁立をめざす経論の解釈、翻訳作業、著述活動が活発となってくる。特にこの地を中心として経論の解釈と翻釈それに著述等に係った曇昿、法成（chos grub）などの人物の活躍が注目されるのである。

このように敦煌が吐蕃によって支配された70年間は仏教も写経から翻訳、更には教理研究と幅広く行われたようであり、中原仏教には見られないこの地独自の仏教学が形成されたのである。その背景としては第一にこの地がチベット、中原、西域胡族に伝統的な仏教を学ぶには地理的にみてよい条件にみたされていたことが上げられる。敦煌の地を支配下においた統主チサン王はこの地に独自の仏教国家を建設すべく外護を与えたのであろう。既に敦煌文献の中には中原や西域にはなく河西地方を中心に特殊な内容を持ち発展した仏教文献の数多くあることが研究者によって論じられている[12]。これら特殊な内容を持つ敦煌仏典の中にアビダルマに係る文献がどれ程存在しているかを検討するのが本研究の主眼なかのである。

何故に敦煌資料の中で特にアビダルマ文献に注目するかといえば、いはば仏教研究の基礎学

としてのアビダルマは難解ではあるが研究者にとって古来、必修の科目であり、どの地に展開した仏教も、その教理の基礎にはアビダルマの導入が不可欠のものとして存在する。この敦煌仏教の地においても基礎学であるこのアビダルマ学が学ばれない筈はない。中原、チベット、西域胡族の仏教が集結する敦煌の地のアビダルマ学を研究することはやがて大乗仏教として開花する仏教の種子を研究することとなる。インドや西域では仏教を学ぶ者は必ずアビダルマの精要たる世親の『阿毘達磨倶舎論』を学べといい、チベットでは顕教学部に5学科があり、これを20年から30年かけて学ぶのであるが、特に律とアビダルマは生涯かけての研究科目なのである[13]。中国ではアビダルマは真諦三蔵（A. D. 499～569）までは毘曇宗として、それ以降は主として倶舎宗として展開している。宗とはいっても宗派のかたちの宗旨ではなく倶舎論学派というべきもので玄奘三蔵（A. D. 600～664）以後には特に盛んに研究された形跡がある。

敦煌資料の中には処々にアビダルマ文献の記述がみられる。『付経暦』（S. 2712）の中で管理係の僧が次任者に送付し、又、新寺建立の際に送付した経論記録の中には

阿毘遠磨大毘婆沙論第十八十卷付戒朗

順正論第四袂　第七満

分別功徳論九卷

阿毘達磨大毘婆沙論第七　十卷一袂

阿毘達磨順正理論第　袂十卷　付金粟

阿毘達磨第十六　十卷

阿毘達磨倶舎論十卷未入

阿毘達磨大毘婆沙　第十二袂　第九袂付曇隠　第六袂第七袂付隠

舎利弗阿曇（ママ）第二　七卷

阿毘達磨毘婆沙十卷

阿毘達磨毘婆沙第十一第十五付法進

阿毘曇八犍　第二十九卷

阿毘達磨第十八進第十九

舎利弗第三　七卷

品類足第一

阿毘達磨第七

阿毘達磨顕宗第二十卷

阿毘達磨倶舎論第袂十卷

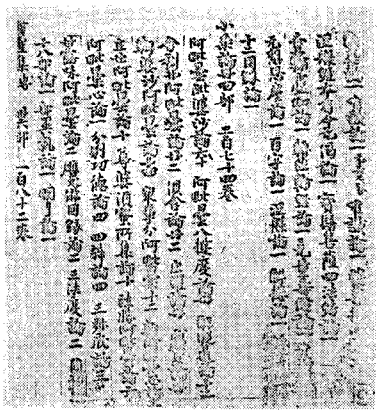
阿毘達磨第十四

阿毘曇第二　阿毘曇第四各十卷

などといったアビダルマ論書の入蔵が記されている。この中には阿毘達磨とか阿毘曇というのみで書名の判名しないものが見られるけれども管理する僧にとっては阿毘達磨蔵として一括入

秩されており、さして問題とはならなかったのであろう。この S. 2712は龍興寺、金光明寺、永安寺、大云寺、興善寺の各院名の下に阿毘達磨の入蔵書名を記しており、敦煌寺院の蔵書状況を知る上で貴重な資料といえる。特にこれらアビダルマの論書を付与された龍興寺の戒朗、金光明寺の金粟、永安寺の曇隠（又は隠）、大云寺の進といった僧については敦煌におけるアビダルマ教学研究との係りを今後充分に考察する必要がある。次に S. 2079は王重民氏によって『大小乗及新翻経巻数目録』[14] の題が与えられているが、この中には

俱舎論上中下三秩卅巻
入阿毘達磨論二巻
阿毘達磨大毘婆沙論二百
阿毘達磨順正理論八十巻
阿毘達磨品類足論上下十八巻
阿毘達磨発智論卅巻
阿毘達磨識身足論十六巻
阿毘達磨集異門足論上下廿巻
顕宗論卅巻
五事毘婆沙論両巻



敦煌出土『大小乗新翻経巻数目録』(S. 2079) 断巻の一部

とあり、六足発智婆沙の主要アビダルマ文献が記録されている。このような入蔵録、翻訳経論記録はこの他にもかなり存在するものと思われる。現在、スタイン本とよばれる Aurel Stein 蒐集の敦煌文献は全容をマイクロフィルムで知ることが出来るが、私はこれらを刻明に検討した結果、従来、首尾破損して書名も判明せず、ただ目録編著者によって「仏経」「仏経疏釈」「仏教戒律」等とのみ記されて内容的にも雑類の部に分けられていた断巻、断片の中に、アビダルマの文献自体であったり、釈疏中にアビダルマ文献を多く依用しているものなどアビダルマ文献が直接、間接に係っている敦煌文書をいくつか知ることが出来た。それらの資料について検討して得た結論を略説するならば、敦煌文献中に見られるアビダルマ資料は

1. 中原において訳出された阿毘達磨論をそのまま敦煌圏へ持ち来って依用したもの。
2. 敦煌を中心とする地域で独自にアビダルマ文献を整理、分類して釈疏の体裁をとっているもの。
3. 大乗の教理を述べるためにアビダルマの教理と比較しつつ一論を構成し、敦煌地域で依用したと考えられるもの。
4. 全く新しいテキストを敦煌に将来し、訳出から論、釈疏まで一連の文献として、この地方で流布されていたもの。
5. 律蔵に係って部派分派の事情を述べるためにアビダルについて関説するもの。

以上の五点に集約されよう。この中、特に4.の新規の原典による独自の訳出と注釈は敦煌仏教

の特色を最も端的に語ってくれるものであり、これらの研究は吐蕃支配期より帰義軍期に至る敦煌仏教の変遷を述べようとする本研究にも多大の資助となるものである。現在までに法成(chos grub)の集成を中心に次の文献は明らかに経、論、釈、疏が一連となって敦煌資料の中に見出されている[15]。

敦煌出土、法成の『大乗四法経論及広釈開決記』(P. 2794)

先ず、『四法経』群は

『大乗四法経』(S. 3194、P. 2350v、P. 2356v、雨55) 訳者不詳

『大乗四法経釈』(S. 609、S. 2707、S. 3194、P. 2350v、P. 2356v) 訳者不詳、世親菩薩作

『大乗四法経論広釈』(P. 2350v) 訳者不詳、尊者智威造

『大乗四法経論及広釈開決記』(S. 216、S. 2817、P. 2794、P. 3007、結30、官42) 法成集

これが四法経関係である。次に『因縁心論』群は

『因縁心論頌』(S. 2462、S. 4235、官68、雨55) 訳者不詳、龍猛菩薩造

『因縁心論釈』(S. 1358、S. 1513、S. 2462、S. 4235、P. 2045、海17、海39、麗83)

『因縁心釈論開決記』(S. 269、P. 2211、P. 2538v) 作者不詳

となっている。又『六門陀羅尼経論』群は

『六門陀羅尼経論』(P. 2402、S. 1513) 訳者不詳、世親菩薩造

『六門陀羅尼経論広釈』(S. 230、S. 848、S. 2709、P. 2404v、結61) 訳者不詳、尊者智威造

『六門陀羅尼経論并広釈開決記』(P. 2165、P. 2256v、P. 2861v)

となる。これらの中で最初の四法経群は法成の集成であるが実にアビダルマの影響の多い文献である。そのことは既に処々で論じたところである。この一群が法成の著述、翻訳の中では現在のところ最初期に属することを考えれば、又、この集成の13年後に同じ説一切有部(Sarvāstivadin)のアビダルマである『薩婆多宗五事論』(P. 2073、P. 2116)という新種のテキスト

による訳出論書が同じ法成によって「甘州張掖県」においてなされていることと相挨って、この地のアビダルマ研究の盛んなることの一端を知りうるのである。

3　敦煌における菩薩四法の問題

既に述べた資料の中、法成の著わした『大乗四法経論広釈開決記』(P. 2794) は現段階では法成作品中、最初期のものであり紀年は「癸丑年八月下旬九日、於沙州永康寺集畢記」となっておりA. D 833年に永康寺で集成されたことがわかる。この永康寺は興善寺と共に吐蕃期にのみ敦煌に存在し、帰義軍期には既にその名を知り得ない[16]。同年10月には同じ永康寺で法成述と推論される『六門陀羅尼経論広釈開決記』があり、五年後のA. D 838年10月には『稲芋経随聴手鏡記』があるから、法成はこの頃まで永康寺に滞在し、その後、甘州に移ったと考えられる[17]。法成の最初期の作品である開決記 (P. 2794) が菩薩の四法に関して説く経典『大乗四法経』(S. 3194、P. 2350v、雨55、P. 356v、P. 3919、李0322、李0352) に依立していることは勿論であるが、これに世親 (Vasubandhu) や智威 (Jñānadatta) の釈が連なって書写せられ開決記で完結している点に敦煌資料四法経関係文書の特色がある。勿論これらの資料は中原で訳出された地婆訶羅訳『大乗四法経』(大正 No. 772) や『仏説菩薩修行四法経』(大正 No. 773) とは異り、敦煌初出の資料であることも注目される。

ところでこの四法経は菩薩が修すべき四種の法について説かれているが、全文僅かに292字で完結した小部の経典である。この経典は法成も言っているように[18] 帰蔵は大乗菩薩蔵に属するものである。しかし内容面よりすると声聞蔵に近く、これが後に至って註釈疏では多分にアビダルマ的色彩を加えられる結果となっている。既に拙稿で述べた如く[19]、法成集成のP. 2794は巻頭よりアビダルマの影響が多大である。中でも『大毘婆沙論』の影響を多く受けている。法成がP. 2794において引用した『大毘婆沙論』1の四法は

又契経説。有四法人多有所作。一親近善友。二従他聞法。三如理作意。四法随法行[20]。

であり、これを四法経の四法と比較しても、その説相に大きな異りはない。この点よりいえば四法経は菩薩蔵とはいえアビダルマ声聞道から初期の大乗菩薩道への過程を実践的に短絡化して示そうとする姿勢を顕著にみせている経典と考えてよい。

四法経の如き菩薩の法数に関する経典としては『大乗十法経』[21] などがあり、敦煌本では『菩薩蔵修道衆経抄』[22] の中にも菩薩の十法として出ている。しかし、これら『大乗十法経』や『菩薩蔵修道衆経抄』の中で引く『宝雲経』1の十法説はかなり進んだ菩薩思想となっている。四法経に近い内容を持つ経典としては『大宝積経』118がある。

復有心不害。二曰志於大哀三曰意多愍傷四曰常調其心。復有四一曰性行清浄二曰無有諛諂三曰精進堅強。四曰忍於苦楽善悪。是為菩薩四法開化衆生。常作此観乃能堪任救済一切[23]。

この経典には菩薩四法の二種が説かれている。又、『大集経』11に説く菩薩四法は一層、四法

経に近い内容となっている。

復有四法聞甚深法心不怖畏。何等為四一者親近善友。 二者善友為説甚深仏法。 三者善能思惟。四者如法而住。是名為四[24]。

と。 最も注目されるのは菩薩の四種法を解説した僧伽婆羅訳と伝える『大乗宝雲経』7である。この経には四法経で説かれた一々について詳しい説明を与えているのである[25]。いづれにせよこれら大部の経典の中で散説される菩薩四法はかつて西域あるいは、敦煌の地で『大乗四法経』の如き小部の経典として単一経典の形をととのえていたのであろう、その経典の1つが敦煌の地に流布していたことは注目すべきことであろう。しかも、これら四法経群は菩薩経典とはいえ、後の大乗仏教を標傍した六波羅蜜、十波羅蜜、十地、四摂事などの思想にまでは高揚されていない。 むしろ未だ迦湿弥羅有部などが立てた四波羅蜜説程度に止っている[26]。 それは菩薩思想としてはアビダルマ菩薩論の延長上にあるものと考えるべきであろう。しかもこ

敦煌出土『大乗四法経』の経論釈が連書されている資料1 (S. 3194)

敦煌出土『大乗四法経』の経論釈が連書されている資料2 (S. 3194)

の経典が「大乘」と名づけられる所以は「菩提心を起す者は菩薩である」という大乘菩薩道の基本的立場を踏襲している点にある。この考え方は『発智論』[27] に説く三十二相を得るまでは菩薩とは呼ばないとする菩薩観、又、『大毘婆沙論』[28] に説く菩薩の定義「三阿僧祇劫修行の後、百大劫の間、妙相業を修して三十二相を得て菩薩と名づける」といった厳しい立場はない。大乘の四法ではこの点は「不惜身命」という言葉で大乘菩薩の立場に一貫性を持たせたところに初期菩薩思想の名残りを窺うことが出来るのである。ここにスタイン本、北京本二本の『大乘四法経』の残葉を紹介しておく。

S. 3194『大乘四法経』の断巻

□□□□□□□□□□□□□□給孤獨薗與大比丘□□□□□□□□□□□□□□摩訶薩俱□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□比丘菩薩摩訶薩盡形壽不顧身□□□四法云何為四諸比

丘菩薩摩訶薩盡形壽不顧身命不捨菩提心諸比丘菩薩摩訶薩盡形壽

不惜軀命不捨善知識諸比丘菩薩摩訶薩盡形壽不惜身命不捨忍辱及調善法諸比丘菩薩摩訶薩

盡形壽

不顧身命常住空閑是故諸比丘菩薩摩訶薩盡形壽不顧身命而□法不應遠離時薄伽梵作是語已

善逝大

師復作是言不捨正智故之心

有智應發菩提心　善住忍辱調善力　不應而捨善知識

辟如獸王離怖畏　有智常住於空閑　若諸智者住此法

降伏諸魔成等覺尒時薄伽梵説是經已諸比丘及諸菩薩摩訶薩一切大衆

聞佛所説信受奉行　　大乘四法經一卷

（このS. 3194は京都大学人文科学研究所蔵並びに京都女子大学図書館所蔵のマイクロフィルムによった。このフィルムの焼付は London Kingsway Africa House の Micro-Film Dept. のものである。スタイン番号は L. Giles の 'Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhang in British Museum' 1957によった。）

北京．雨55『大乘四法経』の断巻

如是我聞一時薄伽梵在舍衛国祇樹給孤獨薗與大比丘衆千二百五十人及諸菩薩摩訶薩俱

尒時薄伽梵告諸比丘言諸比丘菩薩摩訶薩盡形壽不顧身命行此四法云何為四諸比丘菩薩魔(ママ)訶

薩壽形壽不顧身命不捨菩提心諸比丘菩薩摩訶薩盡形壽不借(ママ)軀命不捨善知識諸比丘菩薩摩訶

薩盡形壽不借(ママ)軀

命不捨忍辱及調善法諸比丘菩薩摩訶薩盡形壽不顧身命常住空閑是故

諸比丘菩薩摩訶薩盡形壽不顧身命而此四法不應遠離時薄伽梵作是語已善

逝大師復作是言　不捨正智之心故　有智應發菩提心　善住忍辱調善力　不應而捨善

知識　辟如□王離怖畏　有智常住於空閑　若諸智常住此法　降状諸魔成等覺

尒時薄伽梵説是經已諸比丘及諸菩薩摩畏薩一切大衆聞仏所説信受奉行　大乘四法經

（この北京.雨55は龍谷大学図書館所蔵のマいクロフィルムによった。国立北京図書館所蔵のマイクロフィルムは千字文分類されており、この分類は陳垣編「敦煌劫餘録」にしたがい編集されている。）

4　法成の著述をめぐって

ところで法成（chos grub）は何故に中原の多くの菩薩経典をさしおいて四法経の如き小部の経典を訳出し、注釈を与えたのであろうか。沙州、河西の地で名を馳せた法成は実は蔵漢両語にすぐれた学僧であったとはいえ、中原仏教に関しては曇曠の力を借るところ甚大であった。このことは既に拙論で述べておいたが、この法成の作品を見ると一つの特色のあることがわかる。今、上山氏の労作を参照してそれらを示すならば下記の如くである[29]。

著述

1. （T.）*The story of Maudgalāyana.*〔日連物語〕P.C. 686
2. （T.）*Sūtra-vinaya-śāstra-saṃgraha.*〔経律論集成〕P.C. 687
   （漢文）『歎諸仏如来無染着徳讃』P. 2886

講義録

1. （漢文）『瑜伽論手記』S. 6670、S. 4011、P. 2344、S. 1243、S. 2613、P. 2036、P. 2061、P. 2134 S. 1154、冬72、閏98、S. 6440、露82、P. 3716、秋57、辰87、光26
2. （漢文）『瑜伽論分門記』S. 2552、P. 2122、P. 2038、P. 2039、S. 6788、S. 333、P. 2035、P. 2053、S. 6786、P. 2190、S. 2080、P. 6678、P. 2210

翻訳

1. （T.）*Ḥphags pa laṅ kar gśegs pa rin po cheḥi mdo las saṅs rgyas thams cad kyi gsuṅ gi sniṅ po shes bya baḥi laḥu.*〔聖入楞伽宝経中一切仏語心品〕大谷 *No.* 776
2. （T.）*Hphags pa laṅ kar gśegs pa rin po cheḥi mdo las saṅs rgyas thams cad kyi gsuṅ gi sniṅ poḥi leḥu rgya cher hgrel pa.*〔聖入伽楞宝経中一切仏語心品疏〕P.C. 219
3. （T.）*Ārya-gambhira-samdhi-nirmocana-sūtra-ṭīkā.*〔聖解深蜜経疏〕大谷 *No.* 5517
4. （T.）*Hphags pa (las) legs nes kyi rgyu daṅ ḥbras bu bstan pa shes bya ba (theg pa chen po) ḥi mdo.*〔聴勝劣業因果大乗経〕大谷 *No.* 1023、P.C. 220、P.C. 355 (2)
5. （T.）*Hphags pa gser ḥod dam pa mchog tu rnam par rgyal baḥi mdo sdeḥi rgyal po theg pa chen poḥi mdo.*〔聖微妙金光明最勝王大乗経〕大谷 *No.* 174、P. *tib* 499 P. *tib* 500、P. *tib* 502
6. （T.）*Hdsaṅs blun shes bya baḥi mdo.*〔賢愚経〕大谷 *No.* 1008 (P.C. 217、P.C. 218)
7. （T.）*Ārya-varmavyūha-nirdeśa-nāma-mahāyāna-sūtra.*〔聖顕示冑鎧荘厳大乗経〕大谷 *No.* 760 (7)
8. （T.）*Ārya-āyuṣman-nanda-garbhāvakrānti-nirdeśa-nāma-mahāyāna-sūtra.*〔聖為長老難陀説入胎大乗経〕大谷 *No.* 760 (*B*)
9. （T.）*Ārya-dārikā-viniścayāvalha-pariprcchā-nāma-mahāyāna-sūtra.*〔聖浄信童女所問大乗経〕大谷 *No.* 760 (40)
10. （T.）*Hphags pa dus daṅ dus ma yin pa bstan pa shes bya baḥi mdo.*〔聖時非時説示経〕P.C. 213
11. （T.）*Hphags pa khar sil gyi mdo.*〔聖錫杖経〕大谷 *No.* 1001、P.C. 205 (1)
12. （T.）*Khar sil ḥchaṅ paḥi kun tu spyod paḥi cho ga.*〔執持錫杖普行軌則〕
13. （T.）*Ārya-bodhisattvāvalokiteśvara-sahasra-bhujana-trisig-mahārunika-citta-vistara-paripūrna-*

nāma-dhārani.〔聖千手千眼観自在菩薩無礙広意円満陀羅尼〕大谷 *No.* 369

14. (T.) *Hhags pa spyan ras gzigs dbaṅ phyug gi gsaṅ baḥi mdsod thogs pa med paḥi yid bshin gyi ḥkhor loḥi sniṅ po shes bya baḥi gzuṅs.*〔聖観自在密蔵無礙如意輪心蔵陀羅尼〕大谷 *No.* 370
15. (T.) *Ārga-mukha-daśaika-vidyāmantra-hrdaga-nāma-dhārani*〔聖十一面観自在明呪心蔵陀羅尼〕大谷 *No.* 374
16. (T.) *Yi ge pa brgya pa shes bya baḥi rab tu byed pa tshig leḥur byas pa.*〔百字論頌〕P.C. 588
17. (T.) *Yi ge pa brgya paḥi rab tu byed pa rnam par bśad pa*〔百字論釈〕P.C. 588(2)
18. (T.) *Rten ciṅ ḥbrel par ḥbyuṅ ba tshig leḥur byas pa sum ca pa.*〔縁生三十頌〕P.C. 588(3)、P. *tib.* 769
19. (T.) *Rten ciṅ ḥbrel par ḥbyuṅ ba tshig byas pa sum ca paḥi rnam par bśad pa.*〔縁生三十頌釈〕P.C. 588(4)、P.C. 619 P. *tib.* 770
20. (T.) *Sūtra-vinaga-sāstra-samgraha.*〔経律論集成〕P.C. 687
21. (漢文)『般若波羅蜜多心経』S. 1251、S. 1306、S. 5447、P. 4882
22. (漢文)『諸星母陀羅尼』S. 5010、P. 4587、S. 4495、餘15、號8、秋42、師14
23. (漢文)『薩婆多宗五事論』P. 2073、P. 2116
24 (漢文)『菩薩律儀二十頌』P. 3950
25. (沢文)『八転声頌』P. 3950
26. (漢文)『釈迦牟尼如来像法滅尽之記』P. 2139

集成

1. (漢文)『大乗四法経論及広釈開決記』S. 216、S. 2817、P. 2794、P. 3007、結30、官42
2. (漢文)『仏説大乗稲芋経随聴手鏡記』S. 1080、P. 2284、P. 2303、P. 2461、S. 5835、始62、裳13、M. 1291

S.……***Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhang in British Musseum by L. Giles.*** (1957)
P.……***Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-houang. vol.*** 1 (1970)
P.C.……***Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-Hang in the India Office Library*** (1962)
大谷……チベット大蔵経—北京版、大谷大学図書館蔵(昭和37年)
北京……国立北京図書館蔵敦煌資料、陳垣編「敦煌劫餘録」王重民編「敦煌遺書総目索引」(1942)
P. *tib* …ペリオ蒐集敦煌チベット文献番号
M.……メンシコフ目録 (1963)

上記の如く法成の作品は著述3部講義録2部、翻訳26部、諸経論疏の集成2部の計33部となり、翻訳作品が圧倒的に多い。これらの作品は題号に数字を与えている「法数の経論」、題号に「光」「稲」「錫杖」「冑鎧」「千手」「千眼」などの譬えで示す「譬喩の経論」、アビダルマの説相を内含する「毘曇、瑜伽の経論」に大別される。即ち、法数、譬喩、毘曇というのはインド、西域に伝統的な仏教伝播の形式であった。彼の著述の性向は自ら法成が沙州、河西の地を転々としつつ、西域固有の仏教的相承を西域独自の様式でこれらの地に残したことを物語っているのではないであろうか。「阿含は数の蔵府なり。毘曇は数の苑数なり。」[30] といった道安の言をまつまでもなく、中原の地に仏教を伝えた多くの外国僧は「数論」「数教」「禪数」の戈器であった。『梁高僧伝』[31] には道淵など23名、『続高僧伝』[32] では慧超等8名について「禪経を諷持す」とか「禪数を善くす」又は「数教に精通す」と記されている。法成の作品が多く法数、毘曇、譬喩等に類別されることは、彼がしばしば西域の習慣としての口誦、闇誦等を手

段として経論を伝えたことを示しているとも考えられる。四法経もこのような形式によって、敦煌の地に伝播した法成の最初期の翻訳ではなかったろうか。292字という小部の経典、而も法数によるこの経典は法成にとっては暗誦するに何らの障害も与えなかったであろう。法成は西域に伝統的な方法で独自のテキストを将来し、敦煌の地においてエセイデ、カマラシーラ等のチベット仏教と曇昿、道氤等の中原仏教を合糅させ、敦煌仏教の面目を施していったと考える時、大乗菩薩道を説く四法経の敦煌出現の意味が理解されるようである。法成に係る四法経群が経論釈疏と一連の形で敦煌に残されていた意味は以上のように考えられるのである。

5 法 成 雑 考

四法経は法成と敦煌仏教に係る初期菩薩思想を論じる上で貴重な資料であるが、更にこの経典に対する世親釈、智威釈が残されることによって法成は『大乘四法経論広釈開決記』(以下、開決記と略す)を著わして多くの問題を提示することとなった。特に法成の開決記が曇昿の『金剛般若経旨賛』上や『阿毘達磨大毘婆沙論』1の影響下に構成されていることが拙論[33]によって明らかになった以上、問題は開決記の内容のみでなく法成(hgos chos grub の hgos とは何か等)という人物誌にまで及ぶこととなった。法成自身によって多く形づくられて来たと考えられた教理、教判や引用諸経論の問題まで再検討される時機に至っていると考えられる。今、所引の経論について述べるならば、開決記には『真実論』なる未渡の論書が引用されている。この論が『成実論』でないことは既に明らかにしておいたが[34]、従来までは『真実論』は法成自身がはじめて引用した論書と考えられていた[35]。しかし、この論書は実は曇昿の所立であり、法成は曇曠の説をそのまま開決記に転用したにすぎない。而も『真実論』の断片はその後も次々と敦煌文献中に見出され、その範囲は道氤の『金剛般若経疏』[36] (P. 2330)、註釈者不明の『維摩経疏』、[39] 良賁の『仁王護国般若波羅密多経疏』、[38] 曇昿の『金剛般若経旨賛』[39]上等に及んでいる。このように四法経と開決記は法成を中心に道氤、良賁、曇昿といった中原仏教に接続することとなる。

私は先に法成の教判論が華厳の法蔵の十宗判、更に澄観の立てた十宗判と関係していることを論じておいたが[40]、近時、澄観と浄源が共に著わした『大方広仏華厳経疏』5の中にこの『真実論』が引用されていることを見出した。

> 辨又佛他論第一説。佛亦具十義。謂具一切智一切種乃至故名為佛。又眞諦引眞實論。亦有十義。恐繁不引。[41]

とある。ここには『真実論』が玄奘以前の翻訳の大家、真諦三蔵 (Paramārtha A. D. 499～569) との係りで述べられており注目される。以上のようにこの四法経を中心とする菩薩四法の問題は法成を中心として、教判論、引用経論、教理論に至るまで、敦煌と中原の両仏教圏の交渉史に深く係る重要なテーマをわれわれに提示しているといえるのである。

6 おわりに

敦煌に残された多くの文書の中、アビダルマ文献に関係する一群を研究するのがこの論の主眼である。法成の残した大乗菩薩の四法に関する文献は P. 2794に完全なる写本が残されたことによって、研究は飛躍的に進展した。菩薩四法の敦煌仏教への受容、更には中原仏教との係り、又、法成の人物誌など、従来、暗礁にのりあげていた問題が僅かながらではあるが解明されてきた。吐蕃支配期を舞台に活躍を続けた法成は国家仏教的様相の敦煌の地で翻訳組織の主管 Shu chen gyi lo tsa ba（大校閲翻訳師）として名を馳せていた。彼はその身分をもって中原仏教の道氤、良賁、曇曠といった碩学と交わり、一方ではカマラシーラ等のチベット仏教の碩学に接して自らの教学の礎地を築いた。そして、より特色のある敦煌仏教の形成に力を注いだのである。その彼の最初期の仏教が大乗四法の契経に基づく菩薩思想にあったことは注目すべきである。菩薩思想はまさしく行学即ち、実践学に裏付けられるものである。当時の敦煌の仏教が多く窟院中心の実践的仏教の地であったことを思えば、菩薩の四法の如き簡易明瞭で実践を主眼とする経典は敦煌に生活した蕃漢両族にとって大いなる啓蒙となったであろう。法成の作品の一つ一つにもそのような傾向を充分に窺うことが出来るのである。（1981.12. 1）

註

(1) 王圓籙の敦煌年経類の発見の年時については1900年（光緒26）説から1903年説まで諸説があるが、ここでは可能性の高い1900年説を採った。榎 一雄編「講座敦煌」1 pp. 133-138 大東出版社刊（昭和55年）

(2) 榎 一雄編「講座敦煌」1 p. 129では池田温氏の目録類の分析を参照しており、それに従った。未だ胡語文献の分類はなされていない。漢文文献のうち紀年の判明しているもの4.2%といわれる。

(3) 『史記』「大宛伝」では敦煌と祇連との間には月氏という種族が存在した等と記している。

(4) 現在、県城、都市部には約1万人が居住し、他は農村部に住む。「講座敦煌」1 p. 80.

(5) 藤枝 晃「吐蕃支配期の敦煌」（東方学報31冊）

(6) 『大乗四法経論及広釈開決記』には S. 216、S. 2817、P. 2794、P. 3007、北京.官42、北京.結30、M. 1414の7本が現存する。このうち P. 2794は首尾完全な一本である。

(7) 藤枝 晃「先掲書」p. 266

(8) 藤枝 晃「先掲書」p. 252

(9) Thomas, op. cit., II, 2-6 pp. 46-50、藤枝 晃「先掲書」p. 251

(10) 藤枝 晃「先掲書」p. 251

(11) 竺沙雅章「煌煌の僧官制度」（東方学報31）

(12) 上山大峻「大蕃国大徳三蔵法師沙門法成の研究」下 p. 209（東方学報39、1968）

(13) 福原亮厳監修「梵本蔵漢英和訳合璧 ABHIDHARMAKOŚA 本頌の研究」参照。永田文昌堂刊（昭和48年）

(14) 王重民編「敦煌遺書総目索引」p. 150

(15) 上山大峻「先掲書」下、pp. 135-147参照。

(16) 藤枝 晃「先掲書」p. 266

(17) 上山大峻「先掲書」下 p. 135以下。
(18) P. 2794 法成集成の『大乗四法級廣釈開決記』
(19) 拙稿「敦煌本四法経論広釈のアビダルマ的性格」(日本印度学仏教学研究22ノ1、1973)
(20) 『大毘婆沙論』(大正27. 2・a)
(21) 『大乗十法経』(大正11・764・a)
(22) 大谷大学所蔵敦煌本(大正85・1200・b以下)題新加。
(23) 『大宝積経』118(大正11・670・b)
(24) 『大集経』11(大正13・69・b)
(25) 『大乗宝雲経』7(大正16・276・b)
(26) 神林隆浄「菩薩思想の研究」p. 55以下の「有部の菩薩思想」を参照のこと。
(27) 『阿毘達磨発智論』1(大正26・918・c以下)
(28) 『阿毘達磨大毘婆沙論』176(大正27・886・c)
(29) 上山大俊「先掲書」上、pp. 139-148
(30) 道安「十法句義経序」『出三蔵記集』10(大正55・70・a)
(31) 『梁高僧伝』(大正50・322・a 以下)
(32) 『続高僧伝』(大正50・425・a 以下)
(33) 拙稿「敦煌本四法経論釈について」日本印度学仏教研究28ノ2 (1980)
(34) 拙稿「敦煌本アビダルマ文献の研究-Ⅰ-」相愛女子大学論集24 (1977)
(35) 上山大俊「先掲書」p. 187
(36) 『金剛般若経疏』P. 2330
(37) 『維摩経疏』龍谷大学図書館所蔵敦煌資料
(38) 『仁王護国般若波羅蜜多経疏』上(大正33・429・a)
(39) 『金剛般若経旨賛』上(大正85・69・a) S. 2744、S. 2782
(40) 拙稿「敦煌本四法経論釈—異本の系譜—メンシコフ1414番—」日本印度学仏教学研究23ノ2 (1975)
(41) 『大方広仏華厳経疏』5 (卍續88・44右下)